

バランスの取り方

幼児期から模索

米アップルがタブレット端末「iPad（アイパッド）」を世に送り出した2010年は「タブレット元年」とも呼ばれる。

似た機能を持ちながら、スマートフォンより画面が大きく、ノートパソコンより持ち運びが便利。タブレット端末は、iPadの登場を機に国内外のメーカーが新製品を次々と投入し、市場は一気に拡大した。総務省の調査結果によると、世帯普及率は13年末で21.9%に達した。

文部科学省もこれに着目した。11年策定の「教育の情報化ビジョン」では、20年までに小中高生1人に1台を配備する目標を示した。「21世紀を生きる子どもたちには新しい知や価値を創造する能力が求められる」。目的はそう掲げた。

「現代の子どもたちは生まれた時からデジタル社会。乳幼児期から情報端末に親しむのは自然な流れ」。子どもとメディアの関係を研究する慶応大の石戸奈々子准教授(35)は、スマートフォンによる育児、「スマホ子守」にも柔軟な

考えを持っている。

「ただし、タブレット端末もスマホも肝心なのは使い方」と石戸准教授は言う。「創造や表現のために使う。親子でルールを守る。外遊びやお絵描きといった従来の学びとバランスを取る。そんな意識が必要なのではないでしょうか」

「」「」「」

都心から西へ約40分。東京都福生市の閑静な住宅街に、私立聖愛幼稚園はある。5月中旬、年長組の約30人がタブレット端末に向き合っていた。

「見て、虹色だよ」「こっちは花柄」

1人に1台が用意され、それぞれ液晶画面上で指を滑らせている。指先一つで線が描け、色付けもできる「お絵描きアプリ」。水玉、花と思いきいの絵を描いては喜びや驚きを口にしている。

「幼い子にタブレット端末が必要か」との保護者の反発を心配する一方で、最先端の情報端末が子

子どもが危ない 深刻化するネットの闇Ⅱ

第5部 スマホ子守 ⑧ デジアナ教育

どもの新たな可能性を引き出してくれるとの期待があった。自らもタブレット端末を愛用する野口哲也園長(44)は14年度、そんな思いで新たな試みを始めた。

この1年余り、タブレット端末が子どもの好奇心と創造性を刺激する場面を何度も目の当たりにした。

例えば、アプリによるゾウのお絵描き。園児たちは体の色を「灰色」ではなく、赤や青など色彩豊かに表現した。クレヨンを持たせてもなかなか手が動かかなかった男児も、率先して絵を描くようになった。

「」「」「」

「デジタルかアナログかという二

者択一ではなく、両方の良いところを取り入れてはどうか。そんな『デジアナ教育』ができないものかと考えています」。野口園長は言う。

聖愛幼稚園の「デジタル学習」は月2回、計80分。本来は外部講師による体操や英会話の時間の一部をこれに充てた。粘土細工やノートを使ったお絵描きなど主な「アナログ学習」は削ぎ取っている。

土の感触、鉛筆の握り方、絵の具の匂い……。五感の刺激を「デジタル」で得るのは難しいと思うからだ。

学習でタブレット端末を初めて活用した昨春の「こまを野口園長は覚えている。「ゲームをする機械！」と園児たちに囲まれた。

家で保護者が使う姿を見てきたのか。子守で活用されていたのかもしれない。ただ、そんな光景も「今や珍しいことではない」と感じる。

野口園長は4月、保護者を招き、子どもと一緒にタブレット学習を体験してもらう機会を設けた。

「情報端末を単に使わせる、与えっぱなしにするというのが駄目。正しい使い方を自ら考え、子どもたちを導いてほしい」

それが保護者の責任と、野口園長は思っている。

タブレット端末で絵を描く聖愛幼稚園児たち。幼児期から情報端末との付き合い方を模索する取り組みが始まっている



ご意見、ご感想をお寄せください。〒700-8534、山陽新聞子どもとネット取材班(メールnet@sanyo.oni.co.jp ファクス086-803-8140)。匿名可ですが、連絡先を明記してください。